

## 沖縄県座間味島の観光マーケティングの検討

### A study on tourism marketing in Zamami, Okinawa Prefecture

脇本 忍

Wakimoto Shinobu

#### 要 約

沖縄県の座間味島は、那覇市の泊港から、高速艇で約 50 分、フェリーで約 2 時間、沖縄本島から西に約 40km の東シナ海にある慶良間諸島のほぼ中央に位置する座間味村の主たる島である。明治には、ケラマ節という鯉節の生産が盛んな漁業中心の離島だった。第 2 次世界大戦の沖縄戦では、アメリカ軍が上陸した島で今も戦禍が残る。現在は、第 3 次産業従事者が 90% 以上を超える産業形態の島であり、マリンスポーツを中心とした観光客を招いている。サンゴ礁の保全などの美しい環境を維持させるルールの問題や、オフシーズンの集客戦略が、座間味島全体の現在の課題である。本研究では、座間味島におけるフィールドワークを実施し、座間味島住民から今後の座間味島の産業に関する意識調査を行った。今後は、2005 年にラムサール条約に登録された美しい大自然に加え、新たな観光要因を創出することが、これからの座間味島の魅力づくりの一助となると考えられた。

Key Words: 沖縄県座間味島, エコツーリズム, 沖縄関連映画

#### 1. 問題

沖縄県は、観光立県として多くの観光客を招き入れている。沖縄県文化観光スポーツ部(2015)の調査では、県外からの訪問客の訪問地域については、那覇市が 73% と特筆して高く、本部半島が 37.1%、中西部海岸が 30.0%、離島では石垣島や周辺離島(竹富島・小浜島・黒島・西表島・与那国島・波照間島)の八重山諸島が最も多く 16.3% となっている。沖縄県は 2016 年 6 月に「離島観光の現状と課題」を発表し、県内離島への誘客を図るため、八重山諸島・宮古諸島・久米島・慶良間諸島の 4 圏域を対象に、それぞれのマーケティングコンセプトを発表した。

八重山諸島のコンセプトイメージは「Adventure & Sensibility (冒険心・めずらしい出来事, 感性・感受性)」, 宮古諸島は「Ecology & Luxury (環境にやさしい・自然と調和した, 贅沢・上質)」, 久米島は「Intimacy & Curiosity (親密さ・親しみやすさ, 好奇心・めずらしさ)」, 慶良間諸島は「Pure & Wild (純粋, 自然のまま)」と命名し、ブランディング化しようとしている。

慶良間諸島に訪問する観光客は、同じく離島である前述の八重山諸島や、宮古島諸島の6.4%と比較すると3.5%しかいない。慶良間諸島に属する主な島は、座間味村の座間味島・阿嘉島・慶留間島と、渡嘉敷村の渡嘉敷島・前島だ。慶良間諸島は、那覇の泊港から高速艇では50分程度の近距離にあるにも関わらず、沖縄全体の観光客の3.5%しか立ち寄られていないのが現状である。本研究では、2016年9月1日から4日に座間味村で実施したフィールド調査結果から、座間味島を中心とした観光マーケティングについて考える。

## 2. 座間味島の歴史

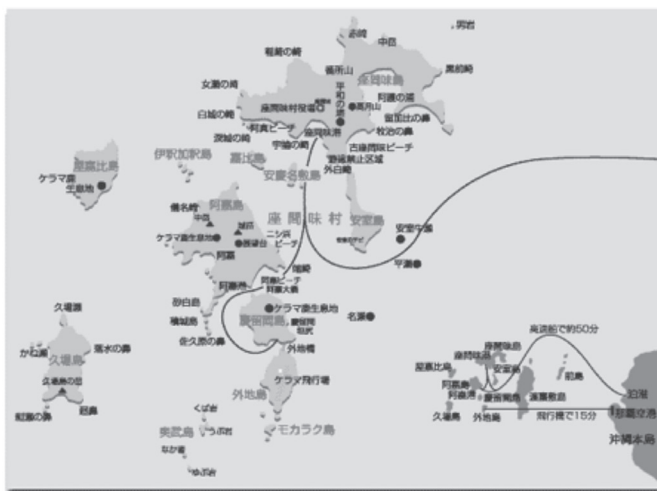


図1. 座間味村の地図(座間味村役場資料より)

座間味村に属する座間味島は、沖縄本島から西に約40kmの東シナ海にある慶良間諸島のほぼ中央に位置する座間味村の主たる島である。面積は6.7平方kmで大岳(うふだき)という標高160mの小山を抱き、島の周辺の海岸線長は23.2kmにおよぶ。財政は年間約20億円の予算であり、2016年現在の人口は601人(348世帯)、就業産業は、第1次・

2.5%、第2次・4.8%、第3次・92.6%で、圧倒的に第3次産業に従事する村民で占められている。

1350年当時、琉球を統べていた察度王が明と朝貢関係を結び、その後は那覇から出港した進貢船や唐からの冊封船が、座間味島の阿護の浦港に風待ちのために寄港したことから、座間味島の海洋思想に磨きがかかり、多数の有能な船乗りを輩出した。番所山(現地読みはバンドゥクル)では頂上部に3台の烽火台を設え、烽火をあげて船が近づいたことを那覇まで知らせていた。現在の番所山には携帯電話各社のアンテナが設置され、時代を超えた座間味島の通信拠点となっている。島の玄関口である座間味港から3kmほどの位置に古座間味という地域があり、一帯の古座間味貝塚からは新石器時代の住居跡が発見され、土器・石器や黒曜石・ゴホウラ貝などが見つかっている。

明治になり、初代村長の松田和三郎が、鰹漁業を創設して島人の雇用を促進した。沖縄本島にも広がり、「ケラマ節」という鰹節が評価され本州にまで届けられていた。同じ頃には、座間味島からの小さな離島である屋嘉比島や久場島で銅の発掘が始まり、第2次世界大戦前まで継続されていた。終戦間際の1945年3月26日、アメリカ軍最初の上陸地となり、戦禍に巻き込まれ多くの村民が犠牲となった。

座間味島は沖縄本島南部に位置する久高島とともに、信仰の篤い島でもある。現在では、時の経過と共に失われていった祭祀もあるが、住民が棲む集落内では拜所（ウガンジュ）を所々に見かけることができ、住民の信仰心の深さを感じさせる。旧暦に沿って、神事が島のどこかで毎月行われている。特に秋に行われる海御願（ウミウガン）は、現在も海洋民族として島の人たちが大切にしている神事である。

### 3. 座間味島の観光資源

座間味島には、「沖縄本島から最も近いサンゴ礁の楽園」というキャッチフレーズがある。白砂の砂浜を抱く点在する無人島を含めた島々と、原色の青と緑の絵具を垂らしたような空と海との色彩は、訪れる人々を魅了する。海中景観の美しさは、ダイバーはいうまでもなく、浅瀬で立ったままシュノーケリングで魚と戯れる子供たちでさえ、非日常的な自然美と出会い嬌声をあげている。2005年にラムサール条約に登録され、世界レベルで貴重なエリアであることが認定された。夏の満月の夜に海中のサンゴが産卵する様子は神秘的であり、沖縄本島周辺で造礁されているサンゴの故郷とも呼ばれている。同年には座間味村と渡嘉敷村が一体となって、慶良間の海を保全推進する慶良間自然環境保護会議が発足した。ダイビング業者や有志のダイバーたちを中心に、サンゴを食い散らすオトヒトデなどの有害海中生物の駆除を実施して、積極的にサンゴの保護に努めてきた。さらに、2012年にはエコツーリズム推進法に基づき、慶良間地域エコツーリズム推進全体構想が認定され、2014年には慶良間諸島が慶良間諸島国立公園として登録されている。

藤澤（2009）は、サンゴ礁保全に関する調査研究で次のように述べている。「2008年4月、エコツーリズム推進法が施行された。エコツーリズム推進法とは、特定の環境資源に関する利害関係者の合意のもとで保全ルールを策定し、保全ルールが認定されれば、そのルールに対して法律で罰則を設けて環境資源の保全と活用の枠組みを提供する法律である。これを受け、全国各地で環境保全の取り組みと、環境を経済システムで融合化していくための取り組みが模索されている。沖縄県の近海離島に位置する座間味村付近には世界有数のサンゴ礁が生息してお

り、現在、その保全が喫緊の課題とされている」。藤澤は、この現状について座間味村の住民にアンケート調査を実施し、環境保全と経済システムの今後のあり方について提案している。

座間味村近海のサンゴ礁には、沖縄本島在住のダイビング事業者も大勢の客を乗せてくる。座間味村のダイビング業者たちが、サンゴ礁への負荷を考慮して自主ルールを設けても、一部の本島からのダイビング業者が無視した行動をするのが現状である。さらに、座間味村内においても、ダイビング協会には加盟せずにダイビング事業を行う業者が存在し、自主ルールが有効に機能しているとはいえ、今後の改善が急がれている。

観光名所としては、古座間味ビーチと阿真ビーチがある。マリンスポーツに興じるだけでなく、眺めるだけでも魅せられる大自然の美しいビーチだ。古座間味ビーチへは座間味港からのバス便があり至便だが、至便ゆえに多数の観光客が訪れることで、多くのサンゴ礁が死滅し、奇形の魚が増えるなどの深刻な問題が起きている。座間味村生まれの男性 K さん（39 才）によると（古座間味ビーチにて）、「子供の頃は、水際までサンゴがあった。もっと後もあったかな。お客さんもたくさん来ていた。サンゴは、あの岩辺りまで続いていた。（略）マリンシューズがでてきたでしょう。そう、そんなヤツ（指をさす）。サンゴ踏んでも痛くないから」。観光客が、素足ではなくマリンシューズを履くようになり、痛くないのでサンゴを踏み殺したというわけだ。奇形の魚については、シュノーケリングで魚と戯れるために、餌付け目的で魚肉ソーセージを食べさせ続けたからだという。魚を共食いに追い込み、奇形が生まれたというのだ。前述したダイビング問題と同様に、ルールの徹底で回避できる課題であろう。

港からのバス便がなく、至便さでは古座間味ビーチに劣る阿真ビーチは、向かいに位置する無人島の嘉比島まではカヤックで渡ることができる距離にある静かなビーチである。ウミガメの生息地で、夜になれば上陸してくる様子の観察ができる。阿真ビーチには、青少年旅行村のキャンプ地がすぐそばに併設されていて、宿泊施設も数少ないことからいっそう長閑に感じられるビーチだ。小さな島の近辺に位置する 2 つのビーチでも、至便さと環境被害問題が表裏一体であることが明らかである。

座間味周辺の観光では、冬から春シーズンに、間近で鯨を観察できるホエールウォッチングや、近年に、「みつしま」という定期小型船が就航したことから、座間味島－阿嘉島のアクセスが非常に便利になり、阿嘉島から橋続きの慶留間島にある、国の重要文化財である高良家住宅を訪れる観光客も増加している。高良家は船頭主家と呼ばれる旧家で、琉球王府時代末期に唐への公用船の船頭職を務めた仲村渠（ナカンダカリ）という琉球士族である親雲上（ペーチン）によって 19 世紀後半に建築された。屋敷の周囲に石灰岩の石垣をめぐらせ、南向きの母



屋の前面には、ヒンプン（魔除けの壁）が建造されている。



図 2. 座間味島の集落

座間味島の観光資源と現在の問題の概略を示した。慶良間諸島の素晴らしい自然環境と沖縄の歴史が関係していることが明らかである。では、沖縄への旅行計画をしている観光客に、さらに座間味島へ思いを馳せさせる方法はないものなのか。沖縄観光で那覇には 73%もの旅行者が訪れるのにも関わらず、那覇から近い離島である慶良間諸島には 3.5%し

か訪問しない現状を打破できる方法はないものなのか。マリンスポーツや自然環境のほかに、訪れてみたいという誘因はどこから発生するのだろうか。

#### 4. 座間味島に関わる人々の話

①場所：那覇市泊港とまりん発券所そば 泊港勤務の K さん（男性 54 才）

・（筆者）「ケラマへは、長い間通っていますが、5 年くらい前から発券所に並ぶ人が多くなった気がします。チケットをすでに予約していても発券手続が必要なので、出航 30 分前に到着するくらいでは出発ギリギリになるので今日もだいぶ早くやってきました」

K「私は、こんな感じになってからの勤務なので、込み具合が変わったのはお客さんのほうが詳しいです。よほどのシーズン真最中か、島への帰省の時期くらいしか込むことはなかったらしいです」

・「特に座間味島は、ダイビング客が大半で、観光客はそんなにいなかった気がします。今もそんな気がしますが、どうですか。シュノーケリングなどマリンスポーツ目的で島を訪れる人がほとんどでしょう」

K「ここでは、そんなことを確認していません。でもそうでしょう、観光だけならあんなに大きなカバン 2 つもいりません」

・「沖縄県内からの訪問者の数はどうですか。タイムスや新報（沖縄タイムスと沖縄新報）の広告を観ると県民向けの那覇からのツアーが掲載しているのをよく見かけます。それから、

外国人観光客は那覇市内だけではなく、離島でも増えましたね」

K「県内からかどうかは、確認していません。乗船者名簿の住所を見たら確認するのは簡単だけれど。見たらなんとなくわかるけど。関係ないしね、仕事とは。外国人は増えましたよ。どこでもでしょ？ 中国から大きな観光船でやって来て、ドッと降りて買い物して船で停まるお客さん。爆買とかすぐわかる」

・「では、外国人は座間味も中国人が多いですか？」

K「イタリア人が増えたらしい」

・「イタリア人？」

K「インターネットか何かで宣伝されたのらしい。ヨーロッパが多い」

※座間味諸島が 2009 年度版ミシュラングリーンガイドで二つ星を獲得し、紹介されたことが起因しているかもしれない。

・「去年に座間味島から、無人島の安慶名敷島に渡船で上陸した時、何人かすでに来ていてシュノーケリングやっていました。そういえばイタリアからだといっていました。スペインからの人もいました。古宇利島でもいました」

K「古宇利は本島中部だから知らないけど、座間味だけではなく慶良間一帯はイタリア人に人気ありますよ（略）」

・「イタリアで、座間味が人気とは。web ですか。沖映通り（那覇繁華街近辺）のラーメン屋さんが、去年くらいから夜中の 1 時でも 10m は並んでいますよ。あれもそうらしいですね」

K「あれは、中国の女優が web に書いたみたい、美味しいのかな」

・「沖縄が観光立県なら、なんでもありですね？」

K「いろいろいえばキリがないです」

②場所：座間味島 105 ストア近く 在住歴 40 年 Y さん（女性 40 才）

・（筆者）「座間味の観光は、マリンスポーツ以外にもあることはよく知っています。観光を盛り上げるために座間味のイベント計画はありますか？」

Y「やってますよ、（たまたま持っていた島のパンフレットを見ながら）まず、8月に座間味祭りでしょ」

・「知っています、去年も今年も台風で流れて 9 月に変更ですけどね、祭りを楽しみにしてエアチケットと高速艇を予約した友達が、那覇に居残りになってブツブツいっていましたよ」

Y「はははっ（笑）、すみません。でも、沖縄のお盆とかそんなこと考えると、どうしても祭

りの時期は8月終わりになります。お友達も懲りずに来年も来てください。阿嘉島も一緒に座間味村で一番盛り上がるお祭りです。舞台を組んでエイサー（沖縄の伝統的舞）や、フラダンスやったり、出店が出たりして賑わいます。あと、4月の座間味島海びらきのときも賑やかになります。まだ、ちょっと海に入るのは冷たいけど、5月になればもう夏でお客さんが増えてきますよ。それから、11月には座間味村、村観光協会、ダイビング協会、ホエールウォッチング協会と連携して、座間味島ファン感謝月間として、閑散期の誘客効果と島内観光関連サービス業者の連携強化を目的にイベントを開催します、と書いています」

・「閑散期の集客が、課題ということですね」

※なお座間味村商工会発行資料には、以下のように書き加えられている。

「一方、座間味村では7月～9月の入域観光客が年間のほぼ半分を占めるため、夏季以外の集客が必須の課題となっています。しかし本村では、海洋資源の活用は進んでいるが、陸域の自然環境や農水産物などの1次産品の地域資源が未活用となっており、その開発や有効活用が遅れています。現状の観光客数を継続的に安定して維持していくためにも、新規観光客（初来島者）の誘致とリピーターづくりに向けた仕組みづくりが必要とされます。そのためにも、今後は村行政、村観光協会と連携し、未活用の地域資源を活かしたメニューの開発や特産品開発等を行い、ボトム期の新たな魅力づくりに取り組んでいきます。（中略）具体的には、村担当課および村観光協会と定期的な情報交換を行い、課題解決に向けたプログラム設定を手掛けます。必要に応じて全国商工会連合会の全国展開支援事業による調査研究事業、中小機構沖縄による地域資源活用プログラム等の補助事業を活用します」。

Y「静かでいいなんていう人もいますが、島のほとんどサービス業ですから、引っ張ってこないとね、英語勉強して、はははっ（笑）（略）」

・「沖縄の離島、特に慶良間は海が素晴らしいので、そっちばかりに観光客も目がいくのですね。やっぱり沖縄とえば夏と海ということですね」

Y「そうです。さあ、これからどうしましょう。はははっ（笑）」

閑散期の観光関連についてのイベント対策に加えて、座間味村では28年度から次の5課題の支援成長計画を設定している。「イベントに伴う集客獲得に向けた個別支援件数」は、現状では0件であるが28年度～30年度の各年での支援を10件に設定している。同様に「Wi-Fi設置支援件数」は、現状0件を28年度～30年度の各年での支援を3件。「外国人観光客対応セミナー回数」は、現状0件を28年度～30年度の各年での支援を1件。「食事難民解消にむ

けた支援件数」は、現状 0 件を 28 年度～30 年度の各年での支援を 20 件（なお、食事難民とは、繁忙期の観光客に提供できる飲食店などの施設不足のために混雑が激しい状態のことを呼び、食事ができないわけではない）。「役場担当課・村観光協会とのプログラム設定会議」は、現状 0 件を 28 年度～30 年度の各年での支援を 4 件にそれぞれ設定している。

また、すでに「経営指導員」を任命して島の経営をリードする役割を担ってきたが、さらなる資質向上と伴走型支援の効力向上をめざしている。そのため、沖縄県商工会連合会や中小機構、よろず支援拠点、県産業振興公社等が主催する研修会へ経営指導員が積極的に参加し、経営戦略やマーケティング等、より高度な経営相談に対応できる知識の習得やスキルアップを図り、支援レベルの維持向上と経営発達支援に必要な支援スキルを身につけることをめざしている。

③場所：座間味島 ご自宅・自家用車中 座間味島在住（男性 56 才）

・（筆者）「よろしくお願ひします。県外で生活をしていたということですが」

○「高校は那覇の高校に行って、大学と仕事はずつと東京にいました。身体の調子が悪くなって、思い切ってこっちに戻るとスーッとよくなりました（略）」

・「座間味の観光のことですが、マリンスポーツはいつごろからですか？」



図 3. 座間味島でのダイビングとウミガメ

○「座間味に、ダイビングを定着させたのは石原裕次郎のおかげです。彼は座間味が好きだったようで、石原軍団を引き連れてよく来ていました。ヨットに乗っていたからではないでしょうか。大勢でね。何年かは忘れましたが、まだその時分はダイビングがスポーツとしては定着していないか、ダイビングをスポーツとして日本でする人はいなかったのじゃないかな。石原裕次郎はすごいよ。海外でやって面白かったのかもしれない。（略）それから、ジャック・マイヨール」

・「映画で観ました。グランブルーやガイアシンプオニーにも出演していましたね。テレビの特番でも観たように思います」

○「ロープにウェイトをつけて素潜りで何 10m も潜ります。座間味によく潜りに来ていました。座間味がダイビングの島のように言われるのはこんな人たちの影響があったからでしょう。もちろんサンゴがあるからだけ。(略) ほら、この島、松の木が多いでしょ、内地みたいでしょ、これは、座間味はずっとカツオ獲っていたから、昔はすごかったそうよ。それでカツオを燻すのに松の木がよかったです、漁師が植えた松の木が今でもたくさん残っている。ほかの離島はこんなに松の木ないよ (略)。こんな話、座間味の歴史にもあんまり載らないからな。いい島です。いろいろ話したいこと、いっぱいあります (略)」

※Oさんの話は興味深く、休むことなく話し続け、自家用車で帰りのフェリー出航寸前に港まで送ってくれた。

座間味と関わっている人たちの話からも、今後の座間味の観光マーケティングの可能性は、自然資源をベースに、さらなるソフトを加えることの必要性を感じていることを推察することができる。海中の魚やサンゴと触れることができる参加型レジャーとしてのダイビングを中心にしたマリンスポーツの島としての地位は、周辺をサンゴ礁に囲まれた地理的優位性を活かし続けることができるだろう。冬から春のホエールウォッチングも参加型レジャーであるには変わりはない。しかし、体力や年齢などの要因で、誰もが参加型レジャーを経験できるわけではない。それらを疑似体験して島の魅力を伝えることのできる戦略のひとつとして考えられるのが、映画作品による PR である。

## 5. 沖縄映画

特定の地域を映画で触れたことから、その地を訪れてみたいと高揚することがあるだろう。映画は、わずか 2 時間前後のストーリーを追うことでその地を疑似体験できる媒体だ。沖縄をテーマにした作品は、これまでに数多く描かれている。沖縄をテーマにした最初の劇映画を特定することは、戦禍の影響などで詳しい資料やフィルムはほとんど現存しないために困難ではあるが、世良 (2008) によると、源為朝を描いた為朝映画と呼ばれる作品群があげられる。「鎮西八郎為朝 (1912)」, 「弓張月源家鎗箭 (1912)」, 「弓張月 源為朝 (1914)」などの作品だ。壮大なロマンを背景とした作品で、伊豆大島に流された源為朝が琉球に渡り、その子どもが琉球初代の王である舜天王となったという伝説が、沖縄と為朝とを結んでいる。表 1 に、その後の沖縄に関連する主な作品を発表年順に記載した。四方田 (2008) から一部引用する。



表 1. 沖縄関連主要映像作品

|       |                                      |                  |       |                         |                   |
|-------|--------------------------------------|------------------|-------|-------------------------|-------------------|
| 1931年 | 執念の毒蛇                                | 監督 渡口春           | 1989年 | からからさんしん                | 監督 小林治            |
| 1936年 | 沖縄                                   | 制作 東京日日新聞 大阪日日新聞 | 1990年 | 老人と海                    | 監督 ジャン ユンカーマン     |
| 1937年 | オヤケアカハチ南海の風雲児                        | 監督 重宗務 豊田四郎      | 1990年 | 3・4X10月                 | 監督 北野武            |
| 1942年 | 海の民                                  | 沖縄島物語 監督 村田達二    | 1990年 | 死の棘                     | 監督 小栗康平           |
| 1942年 | 白い壁                                  | 監督 千葉森樹          | 1991年 | 襲撃 BURNING DOG          | 監督 崔洋一            |
| 1945年 | Occupation of Kin, Okinawa 金武占領(他多数) | アメリカ軍による記録フィルム   | 1991年 | うみ・そら・さんごのいっただえ         | 監督 椎名誠            |
| 1946年 | そこに光を                                | 監督 ジョン ヒューストン    | 1991年 | ぼくらの七日間戦争               | 監督 山崎博子           |
| 1951年 | 唐手三四郎                                | 監督 並木鏡太郎         | 1992年 | パイナップルツアーズ              | 監督 喜屋武力・中江祐司・當間早志 |
| 1953年 | ひめゆりの塔                               | 監督 今井正           | 1993年 | ソナチネ                    | 監督 北野武            |
| 1953年 | 沖縄健児隊                                | 監督 岩間鶴夫          | 1993年 | 新極道の妻たち 覚悟しいや           | 監督 山下耕作           |
| 1953年 | 健児の塔                                 | 監督 小杉勇           | 1995年 | ひめゆりの塔                  | 監督 神山征二郎          |
| 1954年 | 武士松茂良                                | 監督 山城茂           | 1995年 | 光の島                     | 監督 大重潤一郎          |
| 1954年 | 沖縄の民                                 | 監督 吉川卓巳          | 1995年 | レベル5                    | 監督 クリス マイケル       |
| 1956年 | 八月十五夜の茶屋                             | 監督 ダニエル マン       | 1997年 | 秘祭                      | 監督 新城卓            |
| 1957年 | 決戦・伊江島沖                              | 監督 山城茂           | 1997年 | モスラ2                    | 監督 三好邦夫           |
| 1957年 | 大動乱                                  | 監督 石川文一          | 1998年 | BEAT                    | 監督 宮本亜門           |
| 1958年 | 山原街道                                 | 監督 大日方伝          | 1998年 | 夢幻琉球 つるへんり              | 監督 高嶺剛            |
| 1959年 | 海流                                   | 監督 堀内真直          | 1999年 | ナビの恋                    | 監督 中江祐司           |
| 1959年 | 青い珊瑚礁                                | 監督 山城茂           | 1999年 | 豚の報い                    | 監督 崔洋一            |
| 1959年 | グラマ島の誘惑                              | 監督 川島雄三          | 1999年 | 孔雀                      | 監督 クリストファー ドイル    |
| 1962年 | 太平洋戦争と炬ゆり部隊                          | 監督 小森白           | 2000年 | 釣りバカ日誌イレブン              | 監督 本木克英           |
| 1966年 | 網走番外地 南国の対決                          | 監督 石井輝男          | 2000年 | 恋戦 OKINAWA Rendez-vous  | 監督 ゴードン チャン       |
| 1968年 | あゝひめゆりの塔                             | 監督 樹田利雄          | 2000年 | ちゅらさん (テレビドラマ)          | 脚本 岡田恵和           |
| 1968年 | 東シナ海                                 | 監督 磯見忠彦          | 2000年 | リリイ・ジュシユのすべて            | 監督 岩井俊二           |
| 1968年 | ウルトラセブン ノンマルトの使者                     | 制作 円谷プロ          | 2001年 | ホテル・ハイビスカス              | 監督 中江祐司           |
| 1968年 | 神々の深き欲望                              | 監督 今村昌平          | 2001年 | 月のあかり                   | 監督 倉持健一           |
| 1971年 | モトシカカランヌー                            | 沖縄エロス外伝 監督 布川徹郎  | 2003年 | D r.コトー診療所              | 監督 杉尾敦弘           |
| 1972年 | 夏の妹                                  | 監督 大島渚           | 2003年 | 白百合クラブ東京へ行く             | 監督 中江祐司           |
| 1973年 | サンシグラー                               | 監督 高嶺剛           | 2003年 | 島クツバで語る戦世               | 監督 比嘉豊光           |
| 1973年 | 野良犬                                  | 監督 森崎東           | 2003年 | 八月のかりゆし                 | 監督 高橋巖            |
| 1974年 | 極私的エロス 恋歌1974                        | 監督 原一男           | 2004年 | 風音                      | 監督 東陽一            |
| 1974年 | オキナワンドリームショー                         | 監督 高嶺剛           | 2004年 | 星空の島 私の島                | 監督 喜多一郎           |
| 1976年 | 沖縄やぐざ戦争                              | 監督 中島貞夫          | 2004年 | 独立少女紅蓮隊                 | 監督 安里麻里           |
| 1978年 | 一幕一場・沖縄人類館                           | 監督 森口裕           | 2004年 | エレニの旅                   | 監督 テオ アンゲロプロス     |
| 1978年 | ヤマンゴーヌスティダ                           | 監督 謝花健           | 2005年 | ニライカナイからの手紙             | 監督 熊澤尚人           |
| 1978年 | 沖縄10年戦争                              | 監督 松尾照典          | 2006年 | 涙そうそう                   | 監督 土井裕泰           |
| 1978年 | 激突死                                  | 監督 森口裕           | 2006年 | チェケラッチョ                 | 監督 宮本理江子          |
| 1979年 | 沖縄のハルモニ                              | 監督 証言・従軍慰安婦      | 2007年 | Okinawa Shimauta Queen  | 大城美佐子・唄語れえ 監督 大嶺剛 |
| 1980年 | 男はつらいよ 寅次郎ハイビスカスの花                   | 監督 山田洋次          | 2007年 | 恋しくて                    | 監督 中江祐司           |
| 1980年 | 太陽の子 てだのふあ                           | 監督 浦山桐郎          | 2007年 | サウスバウンド                 | 監督 森田芳光           |
| 1982年 | ひめゆりの塔                               | 監督 今井正           | 2007年 | サルサとチャンプルー              | 監督 波多野哲朗          |
| 1982年 | さらば箱舟                                | 監督 寺山修二          | 2009年 | 群青                      | 監督 中川陽介           |
| 1982年 | 対馬丸 さよなら沖縄 (アニメーション)                 | 監督 小林治           | 2010年 | ていだかんかん 海とサンゴと小さな奇跡     | 監督 李闘志男           |
| 1983年 | OKINAWAN BOY 沖縄の少年                   | 監督 新城卓           | 2011年 | 琉球マフヤー THE MOVIE 七つのマブイ | 監督 佐野智樹           |
| 1984年 | 海燕ジョーの軌跡                             | 監督 藤田敏八          | 2012年 | 標的の村                    | 監督 三上智恵           |
| 1985年 | パラダイスビュー                             | 監督 高嶺剛           | 2012年 | ばいかに南海作戦                | 監督 細川徹            |
| 1985年 | 友よ静かに眠れ                              | 監督 崔洋一           | 2013年 | サンゴレンジャー                | 監督 中前勇児           |
| 1986年 | 南へ走れ海の道を                             | 監督 和泉聖治          | 2015年 | 戦場ぬしみ                   | 監督 三上智恵           |
| 1986年 | バナリにて                                | 監督 中江祐司          | 2015年 | うりずんの雨                  | 監督 ジャン ユンカーマン     |
| 1988年 | マリリンに逢いたい                            | 監督 すずきじゅんいち      | 2015年 | 残波 Z AMPA               | 監督 出馬康成           |
| 1989年 | A サインデイズ                             | 監督 崔洋一           | 2016年 | 人魚に会える日                 | 監督 中村暁            |
| 1989年 | ウンタマギルー                              | 監督 高嶺剛           |       |                         |                   |

これらの作品から比較的近年に制作され、舞台が離島の作品に注目してみる。

### 石垣島 「うみ・そら・さんごのいっただえ」 監督 椎名誠 (1991)

八重山諸島石垣島の白保地区が舞台になっている。白保は港がある石垣中心地から9キロほど東に行った静かな集落だ。石垣の中で最も精神性を重んじる地域で、白保の中心には嘉手刈御嶽(ウタキ)と呼ばれる拝所があり、豊年祭などの神事が行われている。この作品の原案は、水中写真家である中村征夫の写真集「白保 SHURAHŌ」であり、白保の海を埋め立てて建設予定だった石垣島新空港計画が白紙に戻ったという社会的インパクトがあった。それらの伏線

も影響したのか、物語では村にリゾートホテルを建築する計画が起こることへの葛藤もあり、社会性の高い作品に仕上がっている。主役は余貴美子、沖縄の著名女優である平良とみが脇を固めている。

#### 栗国島 「ナビィの恋」 監督 中江祐司 (1999)

栗国島は、那覇の泊港からフェリーで約 2 時間 10 分の距離にあり、沖縄本島から至近ではないが、南大東島のような絶海にあるわけではない。観光客が訪れることも少ない地味な印象の島だった。しかし、この作品のおかげで、一躍有名になったといえるだろう。沖縄民謡の大御所を多数起用したコミカルな作品だ。老いらくの恋を描いた過激な結末を迎えるストーリーが隠されている。西田尚美が演じる奈々子は、都会の喧騒に疲れて島に戻ってくる。この設定は、多くの沖縄離島をテーマにした映画に用いられている。モノと情報が錯綜する都会と、海のほかには何もない離島という対比ができるからだろう。戻ってきた奈々子は、島にフラリとやってきた福之助に恋をする。同じころ、白いスーツ姿の老紳士が島に降り立つ。その男は、60 年前の約束を果たすために、移民先の国から平良とみ演ずる老女ナビィを連れ去りに栗国島に帰って来たのだった。しかし、ナビィは恵達と結婚し、孫の奈々子までいる。物語は老若 2 つの恋愛を描き切る。沖縄の自然の美しさや伝統を強く訴えてはいない。

#### 小浜島 「ちゅらさん (テレビドラマ)」 脚本 岡田恵和 (2000)

この作品は映画ではなく NHK 朝の連続ドラマだが、沖縄の離島を描いた作品として取り上げる。八重山諸島に属する小浜島は、大自然が冒険心をくすぐる西表島や、町並み自体が芸術品のような竹富島から放たれる強い個性はなく、八重山諸島のなかでは存在感の欠ける島だった。しかし、この作品が放送されることで爆発的なブームとなり、観光客がロケ地を追いかけた。この作品の特徴は、東京での物語と、小浜島での物語を紡ぐ手法が島への郷愁を高める効果になっている。国仲涼子が演じる恵里と、小橋賢児演じる文也の子供の頃の出会ってから結婚前後までのラブストーリーだが、沖縄の妖精であるキジムナーを登場させたり、八重山のシンボルでもあるガジュマルの木を物語の核にしたり、随所に沖縄の伝統色を呈示している。

#### 与那国島 「Dr. コトー診療所」 監督 杉尾敦弘 (2003)

与那国島は、八重山諸島に属する日本最西端に位置し、晴天の日には台湾を肉眼で見ることが出来る。島の周囲に砂浜はほとんどなく、ゴツゴツした崖で囲まれた絶海の島だ。そんなロ

ケーションが、他の島よりも雄々しく見える所以かもしれない。医師不在だった与那国島比川浜のそばにある診療所に、主演の吉岡秀隆演じる医者 Dr.コトーが赴任する。旅行関連業者が実施したロケ地に行きたい映画ドラマのアンケートでは、国内のロケ地で第1位に選ばれたこともある。撮影セット用に建設された診療所は、撮影後も取り壊すことなく見学することができ、訪れてみると古ぼけた感じをリアルに設営していた。物語は、これまでに赴任してきた医師は、絶海の島を嫌がりすぐに島を出ていくので、島人の医師に対する不信任から始まる。このことから、都会で疲れて島に戻ってくるというような、島を癒しの場所として扱わず、むしろ、絶海の悲壮感と雄々しさを強く表現している。

### 渡名喜島 「群青」 監督 中川陽介 (2009)

渡名喜島は、那覇の泊港から久米島行のフェリーの寄港島だ。旅行者を対象とした、沖縄離島のイメージに関する研究(脇本 2014)から、非常に地味なイメージであることが明らかになった。手つかずの自然と、竹富島にも劣らない美しい街並みがあるにも関わらず、観光客の誘致には、それほど積極的ではない様子が見られる。しかし、島外者にとって、この島の自然と静寂さはとても魅力的だ。主演の長澤まさみが、最愛の母親とフィアンセを亡くす悲運のピアニストを演じている。珊瑚礁の海や紺碧の空が、効果的なカットとして映されて、まさに群青というタイトルを映像がフォローしているような印象だ。渡名喜島に劇映画の撮影隊が入るのは、この作品が最初であり、映画制作に関しては手つかずの島だった。作品は一貫して、主演長澤まさみの心情の変化を追った構成で、全編を抒情的に描き切った作品だ。

## 6. 座間味村と映画

座間味島と阿嘉島を舞台とした映画では、1988年の作品「マリリンに逢いたい」に注目したい。この作品は、シロという雄犬とマリリンという雌犬の実話にもとづいている。

1986年の琉球新報に、小さな記事が掲載されたのが発端だ。阿嘉島に住む雄犬のシロは、飼い主に連れられて座間味島を訪れ、マリリンという雌犬と運命の出会いをする。阿嘉島に帰った後も放し飼いにされていたシロは、マリリンのことが忘れられない。ある日、シロは途中の嘉比島で休みながら約3km離れた海を泳いで渡り、マリリンに逢いに行く。それから毎日のように座間味島に逢いに行った。帰りは泳がずに、夕方5時のサイレンが島中に鳴ると座間味村の役場へ行き、阿嘉島に住む職員が帰宅する船に同乗しながら通ったという。ところがある日、マリリンが交通事故で死亡してしまった。それを知らないシロは、島中走り回ってマリ

リンを探していたが、遂にマリリンの墓を見つけたシロは墓の前でずっと座っていたという。なんと切ないシロとマリリンのラブストーリーが展開されていた。シロは、2000年11月26日に17歳で亡くなった。

このことを新聞記事にしたのが、当時の琉球新報特派員の宮里芳和さんだ。その後、全国紙やテレビ朝日の「ニュースステーション」、海外メディアにまでも取材され、島から島へ海を泳いで逢いに行く犬のストーリーは一躍有名になった。宮里さんはつぎのように語っている。

「白い犬が海を泳いで恋人ならぬ愛犬に逢いに行く。この話題が最初に新聞（琉球新報）で通信員として私が掲載して報道されたのが1986年の暮れも押し迫った12月14日のことでした。それ以来、『シロとマリリン』はたちまち全国愛犬家の注目を集めることになり、全国ネットのテレビ、新聞、週刊誌などの取材が座間味村に殺到したのです。それからほぼ1年を経て、1988年には、映画『マリリンに逢いたい』が制作されて、海峡を渡るシロとマリリンの恋物語が、全国ひいては世界中に紹介されました。このほのぼのとした愛犬の恋物語は、事実に基づいて制作され、広く国民に感動を与えるとともに、ダイビングのメッカの地としての座間味村を有名にし、座間味村の観光事業に大きく貢献しました。私は映画企画から制作まで田中登元村長より『このことは君が火付け役なので松竹映画会社と共に協力をして、素晴らしい映画制作で座間味村が一世一代の観光地としてなるチャンスだ。芳和君頑張ってくれ』と伝えられて、それから約1年近く助監督的な役割をさせられたのです。マリリンは、映画の制作を待たず1987年8月28日に亡くなりました。シロはその後も長らく阿嘉島の中村利一さん宅で元気で生きていました。しかし、そのシロも天国に召されマリリンのもとへ旅立ちました。そこで座間味村においては動物愛護と自然保護の精神、そして世界の恒久平和を基本理念とし、シロとマリリンの恋物語を末永く後世に伝えていくことを目的に2001年に、阿嘉島にシロ、座間味島にマリリンの銅像を向かい合った状態で建立したのです。2016年には恋物語から30年になります。私は記念事業をなにか行うことを考えています。皆さん良いアイデアがありましたら教えて下さい。シロとマリリンを讃える座間味村イメージソングです。この歌も私の企画制作です。歌題名『青の楽園』。

♪あなたが待つあの島から 南風が吹いてくる 胸にわきあがるいとしさが 高く雲を超える  
♪

♪虹の橋を くぐりぬけて はるか とおく 進む船真っ赤に燃える 花の影に 集う島人たち  
♪

♪広がる空の下（もと） 泳ぎだそう 澄みわたる青の楽園 ああ いつの日も海は何もかも

つつみこむ深い愛のよう♪まだ歌詞は続きますが、ここまで紹介いたしました。歌は癒し系のソングです」



図 4. 阿嘉島のシロの銅像



図 5. 座間味島のマリリンの銅像

宮里さんは2016年5月22日の琉球新報に次の記事を掲載している。

「その犬を見た時はわが目を疑ったー。『シロじゃないのか。それともシロの子どもなのか?』。30年前に“恋犬”に会いたい一心で、阿嘉島から座間味島までの3キロの海を渡り、映画にも出演した『シロ』。そのシロにそっくりな犬が目の前にいたのだ。大きさも姿も、色も表情も似ていると、地元でも話題になっている。今年12日、座間味区のスーパーの前に、その犬はいた。私がシロにそっくりだと驚くと、周辺にいた住民たちも、ほんとだ、ほんとだと声をそろえ、ちょっとした騒ぎになった。全身の白毛はもちろん、目鼻立ちから立ち居振る舞いまで、座間味島の名を一気に高めたヒーロー、あのシロに生き写しだったのだ。飼い主と一緒にだった。那覇市に住む髙原大志さん(34才)。座間味島には何度か遊びに来ていて、この日も犬を連れて訪れ、スーパーに立ち寄ったところだという。髙原さんによると、犬の名前は『ハブ』。11歳の雄。沖縄で生まれたのだという。親犬は現在、東京で暮らしているとのことだ。シロとの関係は分からないようだが、もしかして、近親の可能性もあるのだろうか。今年シロが海を渡る姿が目撃、撮影された1986年から30周年。目撃の2年後には映画『マリリンに逢いたい』が製作されて全国上映され、一躍人気を博した。これをきっかけに座間味村への観光客も増えるなど、シロはいまでも島民にとって忘れ難い存在だ。ハブを見て、思った。『マリリンに逢



いたい』の第2弾が製作される日が来るかもしれない」

この琉球新報の記事からも、宮里さんのシロとマリリンへの愛情が強く伝わってくる。映画では、シロとマリリンのラブストーリーと呼応するように、東京から写真を撮りに訪島した役の主演の安田成美と、座間味島に住む漁師役の加藤昌也の恋物語が展開され、シロとマリリンのラブストーリーとの相乗効果が認められる。東シナ海をシロが泳ぐシーンが何度も登場するが、原色の美しい海に見とれるよりも、ひたすら泳ぐシロの姿に感動してしまう。

## 7. 考察

国土交通省は、美しい国づくり政策大綱を策定し、景観法が2005年6月に施行された。その翌年、全国第1号の重要文化的景観として、滋賀県の「近江八幡の水郷」が認定されている。第1条に「この法律は、日本の都市、農山漁村等における良好な景観の形成を促進するため、景観計画の策定その他の施策を総合的に講ずることにより、美しく風格のある国土の形成、潤いのある豊かな生活環境の創造及び個性的で活力ある地域社会の実現を図り、もって国民生活の向上並びに国民経済及び地域社会の健全な発展に寄与することを目的とする」と記されているように、地域の個性的な生活や文化を育んできた背景には、独自の自然環境や美しい景観があることを明確にして、住民以外の地域の人々にアピールし、観光産業に寄与させることを期待している。

座間味村は、ラムサール条約に登録されたことから、世界的に貴重なエリアであり、美しい自然景観であることを観光の中心に設定してきた。今後もこの観光戦略を継続することで、さらなる観光客獲得の期待は膨らむ。だが、今回のフィールド調査の結果から、いくつかの問題点を抱えていることが推察された。

まず、新たなマーケットとして、外国人観光客の宿泊場所・食事・コミュニケーションについての課題が確認された。沖縄県では、2012年に決定した第5次観光振興基本計画で、2022年度の目標観光客数を1,000万人として、外国人観光客数を200万人と設定している。現在では、近隣の台湾・韓国・北京・上海・香港の東アジア地域からが主であるが、近年から徐々に増加してきたヨーロッパ諸国からの観光客についても、現在の1万人から3万人を誘致目標としている。各国現地旅行博覧会への出展や、各国の著名アウトバウンド旅行者や旅行雑誌記者などのキーパーソンへの招聘を積極的に実施している（沖縄県文化観光スポーツ部 2012）。南西地域産業活性化センター（2012）が実施した沖縄における欧米人観光客の誘致に向けた基礎調査からは、外国人観光客誘致について、これまでは近隣アジアを中心に施策が展開されて

きたが、市場の拡大とリスクの分担といった様々な観点から、中長期的には欧米マーケットが新たなターゲットとして有力であると認識が共有することができることも述べられている。これらのことから、那覇空港から至便な座間味村へ、船旅も楽しみのひとつに加えた観光ツアーコースをアピールすることで、現在では大半を占めるダイビング目的に加え、景観観光目的の外国人観光客の誘致に積極的な施策を示す必要があるだろう。

つぎに、座間味村におけるソフト開発の必要性があげられる。座間味村から特出した「名物」や「おみやげ」を強引に創出してもよいのではないだろうか。現在では約 90%の島民が第 3 次産業に従事するが、第 1 次産業や関連加工業に着目し、地域特産の海産物や農産物であれば、座間味のネームバリューと美しい景観イメージをオーバーラップすることができ、他地域の名産品以上にアピールすることができると考えられる。

さらに、本稿で前述した映画制作を起爆剤とした観光マーケティングの推進化が期待できるだろう。映画「マリリンに逢いたい」は 1988 年に封切られた。シロがマリリンに逢うために阿嘉島から座間味島まで泳いで渡る実話から完成されたこの作品は、主役を演じる男女の恋愛も背景にした佳作であり興行的にもヒットし、阿嘉島と座間味島にはそれぞれシロとマリリンの像が建った。しかし、当時はバブル経済期ではあったものの沖縄への観光客数は年間約 250 万人（観光収入 2400 億円）であったのが、2014 年には約 800 万人（観光収入 6000 億円）にまで拡大している。当時以上の観光客が那覇空港に降り立つことから、当時以上に座間味の映画マーケティング効果を期待できるだろう。諸外国へは、各国言語に翻訳した映画作品を配信することで、座間味への関心を促すことが期待される。環境映像としてでも価値ある圧倒的に美しい座間味の景観は、他地域にないアドバンテージであり、それらを背景にした劇映画作品に魅了された国内外観光客の座間味訪島につながることを考えられる。

現在の座間味村の最大の誘致要因である、体験型観光であるダイビングなどのマリンスポーツに、映画の撮影場所に思いを馳せるロケ地ツアーメニューが加わることで、座間味村を訪れるターゲット層を拡大することが期待でき、現在の問題である閑散期にも安定した訪島者の獲得に寄与できるのではないだろうか。渡名喜村の渡名喜島には、2009 年に封切された映画「群青」の資料館があり、撮影で使用した様々な小道具類が提示されている。座間味村においても、「マリリンに逢いたい」の完成 30 周年としてパネル展などでシロとマリリンが再注目されている。前述したシロとマリリンを世に知らしめた宮里さんが望むように、第 2 弾が制作される日を待ちたい。

最後に、座間味村を舞台にしたオール沖縄ロケ敢行の新藤風監督の意欲作で、子役の伊東蒼

と女優の安藤サクラが主演の映画、「島々清しゃ（しまじまかいしゃ）」が 2017 年に封切られる。この作品が、今後の座間味島訪島者拡大のきっかけになることを願う。

## 8. 参考・引用文献

藤澤宜広(2006), 慶良間諸島海域におけるサンゴ礁保全交渉, 地域研究 2.

藤澤宜広(2009), 沖縄県近海離島におけるサンゴ礁保全に関する住民アンケート調査: 座間味村を事例として, 沖縄大学法経学部紀要 13.

中島泰(2016), 地域主体による持続可能な滞在型観光地づくりと座間味村観光の未来, ECO-Okinawa 地域セミナーin 座間味発表資料

南西地域産業活性化センター(2012), 沖縄における欧米人観光客の誘致に向けた基礎調査, 平成 24 年度自主研究資料.

仲里効(2007), 沖縄イメージの縁, 未来社.

野里洋(2007), 癒しの島, 沖縄の真実, ソフトバンク新書.

沖縄県文化観光スポーツ部(2015), 平成 27 年度離島観光活性化促進事業離島観光マーケティング戦略事業資料, 沖縄県.

佐藤快信(2010), これからの観光の方向性: 沖縄県の観光を事例として, 長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要 8.

世良利和(2008), 沖縄劇映画大全, ボーダーインク.

脇本忍(2014), 沖縄離島イメージについての心理学的研究-島尻郡渡名喜島の視点から-, 兵庫大学論集 19.

四方田犬彦(2008), 沖縄映画論, 作品社.

座間味村商工会(2015), 経営発達支援計画, 座間味村商工会資料番号 3360005001203.